吾妻山の噴煙について*

福　島　測　候　所**

吾妻山の噴煙は，昭和25年2月10日(1950年)の噴火以来継続していたが，昭和27年5月23日(1952年)夜半から，新噴火口の噴煙が急に多くなった．しかし，その後は次第に旧に復しつゝあるもののようである．次に現在までの状況をとりまとめ報告する．

(i)5月24日朝，当所から望見される噴煙が急に多くなり，微温湯温泉の二階堂氏からも「23日夜半ころから噴煙が多くなった」との電話に接した．また，荒川発電所（火口から東南東約8km）でも，23日夜半から24日朝にかけて，数回の小爆発音らしいものを聴取した．火口附近で毒水処理に従事している者の情報によれば，この噴煙の増大にともない硫黄粉の噴出が多くなり，噴火口から約1km離れた桶沼は[1]，一時，硫黄のため黄色に変色したとのことである．また，多少小石を噴出したらしい．従来流出していた毒水は，24日朝に停止したが，26日ごろからは以前の$^1/_4$程度の流量でふたたび流出し始め，噴煙もかすかながら旧に復しつつあるということである．また，福島測候所から望見すると，噴火口一帯は青灰色に変色してみえるが，25日朝にはさらに色がこくなったように思われた．5月14日，当所田島所長らが登山した際にも残雪の上に火山灰が積っていたが，今冬以来噴煙にまじって連続的に積ったものか，間けつ的に積ったものかは判明しなかった．

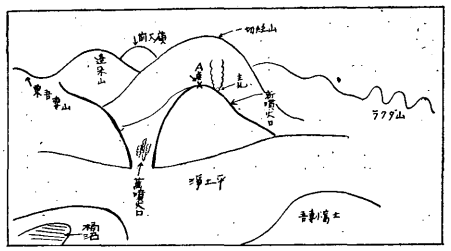

Fig. 1　桶沼から新噴火口を望む

(ii)　5月23日以後の経過は，当所齊藤(慈)，堀井，藤原技官らによると，噴煙の噴出音は約2km先からも聞えるらしく，約1kmの地点（桶沼附近）で噴火口を発見した際，噴出音はかなり大きかった．また，途中の山かげでは，風に鳴る木の音で聴取できなかったそうである．この噴出音は昨年の同月ごろの噴出音に比べて，かなり大きくなっているとのことである．旧噴火口附近には，消えかかったような煙が十数箇所立ち昇り，新火口にも十数個の噴煙があって勢がよいのは Fig. 2 B点から少し離れたがけ上約5mの高さの2個であり，上方のものが主孔と見られ，下方のものに比べると2倍ほど噴出孔が大きく，また噴出量も勢力もともに強い，他の群孔は，旧噴火口と同様に細い噴煙が立ってい

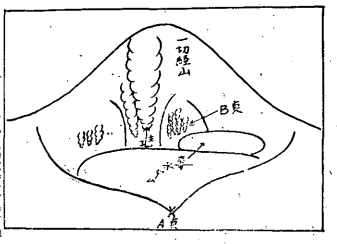

Fig. 2　A点から噴火口を見おろす

* Fukushima Weather Station; On minor Activity of Azuma Volcano.

** 藤原　仁　記

(1) 験震時報 **15** No. 2 (1951) 55 の図参照

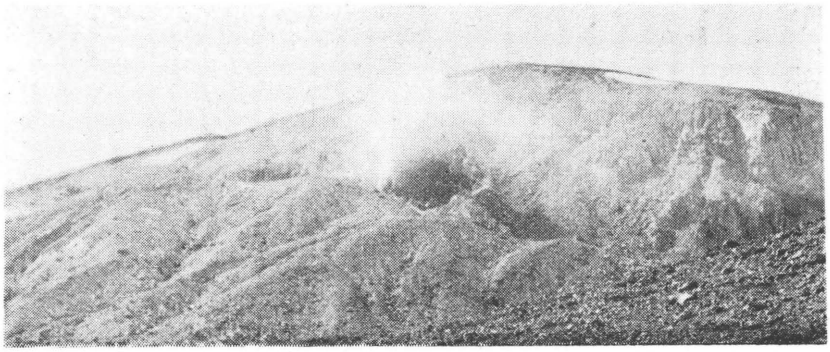

Fig. 3　吾妻山－切経山の噴気孔
1952年5月14日吾妻小富士西北西鞍部海抜1640 mの地点から撮影

るだけである．毒水はおもに主孔から流れ，約 20 m² の沼を造っており，濃い硫黄水を粘土にまぜて沸とうさせたような色を呈しており，その流量はきわめて少ないようである．火口から約200 mの範囲に，あたらしいと思われる小石が見られたが，これは23日夜半から24日朝にかけて吹き飛ばされたものであろう．遠望して青灰色の硫黄粉のためと思われる変色は，現地に行っても明りょうにその色状が見られ，吾妻小富士，桶沼，浄土平一帯にわたって降灰したもののようである（石の裏面は変色していない，しかし，灰は地面に積っているほどは見られなかった）．なお，桶沼は平常の色を呈していた．また，噴煙量は23日以前に比べてまだかなり強く，噴火口附近は噴煙のため猛烈な硫黄と焼石のにおいをまぜたような，むせかえる臭気で満ちていた．

その後，6月にはいってから現在まで，格別の状況の変化はない．なお，当所のウィーヘルト地震計にはなんらの別状も見られず，附近の温泉群や安達太郎山などにも別に変化らしいものは認められないようであり，これに関する報告は受けていない．

追　　補

吾妻山で，5月17日二階堂哲三氏が採取した火山灰を，東北大学理学部岩石鉱床学教室で分析した結果は次のとおりである．

硅酸：55%，硫黄および硫酸アルミニウム：20%，鉄分（過酸化鉄，亜酸化鉄）：10%，
石灰：10%，その他（苦土，ソーダ，カリなど）：5%．